

好きなメニューをつくろう ～ What would you like?～ (第5学年)

1 目指す子供の姿

【互いに磨き合い、学び続ける子供の姿】

レストランでの注文場面において、自分の考えや気持ちを丁寧に伝えるために、外国語や各国の食べ物や食生活を社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、目的や場面、状況等に応じて情報を整理しながら、自分の考えに合った表現にしようとし、友達等と交流を繰り返している。

知識・技能	学びに向かう力・人間性等	思考力・判断力・表現力等
家族の呼称や、丁寧に注文や値段を尋ねたり答えたりする表現を聞いたたり言ったりすることができる。また、簡単な語句を書き写すことができる。	他者に配慮しながら、丁寧に注文を尋ねたり答えたり、メニューについてまとまりのある話を聞いたたり、感想を伝えたりしようとする。	丁寧に注文を尋ねたり答えたりして、自分の考えを伝え合うとともに、簡単な語句を推測しながら読む。

本単元導入で、子供たちはイラストを見たり、デジタル教材を視聴したりし、世界には様々な人々がいて、様々な生活があることに着目して、世界の食べ物や食生活を捉えた。そして、レストランでの注文場面において、家族に使っているこれまでに学んだ“**What do you want?**” “**I want ~ .**”という表現と、店員が使っている表現との違いを感じ、客と店員の丁寧なやり取りに興味をもった。英語にも丁寧な表現があることを知った子供たちは、目的や場面、状況等に応じて表現を使い分ける必要性を感じ、自分の好きなメニューや誰かのためのメニューをつくるために、オーダーバイキング形式という設定で、客や店員となってやり取りをしていった。店員役の子供が“**What would you like?**”と聞くのに対して、客役の子供が“**I'd like curry and rice.**”などと答え、メニューを完成させていった。さらにメニューの注文を受けた店員の子供がオーダー表を書くという設定で料理名を書き写す活動を取り入れ、書く力を高めていった。これらのやり取りの中で、例えば「お母さんのためのメニューには、パンを入れたいけれど、何て言うんだろう」という思いをもった子供が、友達や教師等との関わりを通して「パンは **bread** と言うんだな。“**I'd like bread.**”と注文しよう」と考えたり、「お父さんにはたくさん野菜を食べてほしいから、サラダを二つ注文しよう」という思いをもった子供が、“**Two please.**”と注文したりするなど、自分のつくりたいメニューを完成させるために、友達等と繰り返しコミュニケーションを図ろうとする姿を目指して実践を行った。

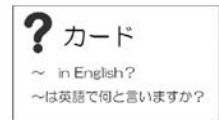
2 子供の実態（本単元に入るまで）

メタ認知に関する実態調査から、振り返りのよさを実感していないと想定される子供が34名中12名いた。英語に関する実態調査から、「英語の授業でその日、どのようなことが分かったのか考えていますか」という質問に対して、していない、あまりしていないと答えた子供が5名おり、振り返る観点が明確にもっていないことが考えられた。また、「英語の授業中にもっと知りたい表現や分からない表現が出たとき、どうしていますか」という質問に対して、自分の思いとは違う表現に変えている子供が2名、「絵カードを探す」などの解決方法を一つだけ意識していた子供が12名いた。これらの子供は尋ね方が分からないために、分からない表現に対して、自分の考えを十分に表現できないことが想定された。ただ、友達に聞くという方法を回答した子供が30名おり、友達と協働しながら解決し、そのよさを感じている子供が多いことから、本単元でも協働して解決していけると考えられた。

3 メタ認知を促す働きかけ

(1) 課題解決中

?カード（はてなカード）を用いて、進んで尋ねることができるようにした。このカードには“～ in English?”と尋ね方が分かるようにしておき、裏面にはこれまで尋ねた言葉をためられるようにし、進んで尋ねようとする気持ちを高めた。子供たちは裏面を見て自分が知っている表現かどうかを確認し、表面を使って友達や教師に尋ねに行った。カードを使って自分から尋ねられている子供を称賛し価値付けることで、分からないことをそのままにせず、何とか伝えようとする大切さを感じさせたいと考えた。【?カード】（1～6時間目）



【?カード】

(2) 課題解決後

班で分かったことを話し合わせることで、振り返りの観点が明確でない子供も、どんな観点で振り返りを行えばよいか共有しながら振り返ることができた。全体で振り返りを出させる中で、「今日は何んかできたかな」「次にしたいことはありますか」と問いかけた。さらに理由を出させる中で友達との関わりに着目している発言を取り上げ、協働のよさを感じられるようにした。子供たちは振り返りカードに記述し、再度個人での振り返りを深められた【Can カード】（1～6時間目）

4 単元構成の工夫と学習の流れ（総時数 6時間）




単元導入から聞くことや話すことを繰り返し行い、単元途中から、学習した言葉を読んだり書いたりする活動を行った。単元後半では、これまでの学習を基にしてクイズ形式等で話す活動（発表）を取り入れ、子供が英語を進んで使おうとするように段階的に指導していく単元を構成した。

なお、外国語科の時間には保護者ボランティア（ママーズ）が授業のサポートをしてくれている。

次	学習の流れと主な子供の意識	
第 一 次	① 世界の料理を見てみよう	世界の料理についてかかれたイラストを見て、どんな料理かを想像したり、デジタル教材を見て分かったことを書いたりする活動を通して、世界には様々な人がいて様々な料理があることを知った。英語で言うことのできる料理を挙げるとともに、料理を表す単語を発音する活動を行い、単語の発音に慣れ親しんだ。
	② どんなメニューにするか考えよう	まず、自分ならどんなメニューが作りたいかを考え、メニューをつくるためのやり取りへの意欲を高めた。既習である“What do you want?”と“What would you like?”を比較して、なぜ違う表現が使われているのかを考え、英語にも場面に応じた丁寧な表現があるという知識を獲得した。そして、友達等とのやり取りを通して、様々な料理などの言い方や丁寧に欲しいものを頼む表現に慣れ親しんだ。
第 二 次	③④ 丁寧な表現で尋ねたり答えたりしよう	値段の尋ね方や、答え方などの表現についても慣れ親しみ、自分も店員や客となってメニューをつくりたいという思いを高めた。これまでに慣れ親しんできた語句について、単語だけで提示し推測して読む活動を行った。『We Can!』の登場人物がどんな相手にどんなメニューをつくったのかやそのメニューの値段を聞き、やり取りをする際の参考となるようにした。そして、誰かのためのメニューを考えるとともに、チャッツで“What would you like?” “I'd like ~”を繰り返し聞いたり言ったりして表現できるようにした。
	⑤ ○○のためのメニューをつくろう	本時（5/6） 店員と客とに分かれて、メニュー表の料理から○○さんのためのメニューをつくった。“What would you like?” “I'd like ~”の表現を使って、○○さんのためのメニューに必要な料理をそろえていった。店員が料理名を書き写し、オーダー表とする活動を取り入れて、簡単な語句を書き写す技能を高めた。
	⑥ 自分のつくったメニューを紹介しよう	前時につくったメニューをクイズ形式で紹介したり、選んだ料理について話したりした。前時、選んだ料理と本時に選びたい料理を交換して新しいメニューをつくるやり取りの中で、学んだことを再確認した。

5 本時における子供たちの姿（5/6時間、マ：ママーズ）

本時は、考えたメニューに必要な料理をそろえるために、客と店員に分かれて、丁寧に注文を伝えたり答えたりできることを目指した。

学習活動	授業の詳細と主な子供の意識
<p>課題設定以前 〈学習活動1〉 学習課題を確認する。</p>	<p>子供たちは、前時までに自分がメニューをつくりたい相手（母親・ALTなど）を決めていた。また、店員と客とに分かれてやり取りを行ってみたいと考え学習課題を設定していた。本時では、あいさつなどのやり取りを行った後、学習課題を確認した。</p> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px 0;"> <p>〇〇のためのメニューをつくらう</p> </div>
<p>課題解決中 〈学習活動2〉 自分の好きな料理を注文する方法を確認する。</p>	<p>まず、誰のためのメニューをつくりたいと考えていたのかを確認した。そして、これまでの学習を振り返り、店員が尋ねるときの“What would you like? ”、客が注文するときの“I'd like ~.”の言い方を確認した。チャンツで言い方の練習をした後、複数の友達と、言い方の練習をした。その際、分からない表現がある子供は？カードを用いて担任やママーズに“~ in English?”と尋ねていった。？カードの裏面には、これまで尋ねた言葉が日本語と英語で書かれており、子供たちは、そこに書いてある言葉を見ながら、言える言葉、言えない言葉を判断していた。（マ子供のやり取りを見て、できているか確認するとともに、分からない言葉を尋ねられたときに答え、その綴りを？カードに書きこんだ。）【？カード】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">メタ認知を働かせている様相</p> <p>ふだんは、あまり自分を振り返ることのない子供（C1）が、？カードを使い、分からない言葉を確認していた。その後、分からない言葉を積極的にママーズに聞きに行っていた。</p> <p>C1：たこやき in English? マ：It's takoyaki. C1：たまごかけごはん in English? マ：It's tamagokakegohan. C1：どっちもそのままなんだね。（カードに記入）</p> </div> 
<p>〈学習活動3〉 客と店員に分かれて必要な料理をもらって〇〇のためのメニューを完成させる。</p>	<p>（マ担任と共にこれから行うやり取りのモデルを示した。）その際、教師は誰にどんなメニューをつくるのかを例示し、メニューをつくらう相手に相手の好みなどを紹介し、それに合うように味や量を変えていった。例えばチョコレートが好きな息子のためにチョコレート味にするなどである。その言葉を使う必要性やよさを子供たちに語らせることで、子供たちは教師の思いと自分の思いを比較しながら、メニューにない品物でも、自分が欲しい量や味を伝えて注文できることに気付いていった。数や量や種類に関わる言葉はホワイトボードに位置付け、その表現を使えるようにした。</p> <p>そして、子供たちは客と店員に分かれてやり取りを行っていった。メインディッシュ、デザートなど5種類のブースを設けて、それぞれのブースに何の料理があるか分かるように示しておいた。各ブースの店員（3</p>  

～4人)が、そこに来た客に対して、“What would you like?”と尋ね、客が“I'd like ～.”と注文を伝え、料理の絵カードをもらって各自が持っているボードに貼り付けるというやり取りを行った。学習活動2で出てきた料理も注文できるように白紙のカードも用意しておいた。客は、5種類全ての料理を入れて自分のメニューを完成させていった。子供たちはメニューをつくりたい相手に合わせて、数や量や種類などを変えており、より自分の思いに合うメニューになるように活動できた。(マ各ブースにいて、表現できずに困っている子供にアドバイスをしていた)店員は客からの注文を聞いて、オーダー表に単語の綴りをなぞっていった。店員と客を交代しながらこれらの活動を繰り返し行った。



やり取りが終わった後、全体で、なぜ“What do you want?”でなく、“What would you like?”を使ったのか問いかけ、丁寧な表現であることを再度確認した。また、?カードでどんな言葉を聞きに行ったのかを問い、それらの言葉を黒板に位置付けて全体に広げた。分からない言葉を進んで尋ねていることを称賛し、分からないことやもっと知りたいことを解決することで自分の言いたいことが伝えられることに気付かせた。

課題解決後
(学習活動4)
本時を振り返る。

まず班で分かったことを話し合わせた。そして、全体で発表させるとともに、友達やママーずに聞いてうまく活動できた子供を挙手させ、協働のよさを感じられるようにした。その後、自分の活動を振り返ってできたことをカードに記入した【Canカード】さらに、もっとしたいことを問いかけ、「友達のメニューを聞いてみたい」「値段をつけてやり取りしたい」という思いを確認した。



メタ認知を働かせている様相 (班での話し合い)

C2: 始め何を言っているか難しかったけど、途中から注文の表現がうまく使えた。
C3: お店で多いとか少ないとかが言えた。自分でたくさんの料理カードがかけた。
C4: みんなが教えてくれて言えるようになった。

6 考察 (○: 成果, ●: 課題)

- ?カードで自分の分からない言葉を確認できており、分かったことを振り返ることができるようになってきていると考える。さらに自分から尋ねられている子供を称賛し価値付けたことで、単元を通して、自分から尋ね解決できるようになったと考えている。分からないことをそのままにせず、何とか伝えようとする姿勢が育ってきている。互いに磨き合い、学び続ける姿が育っていると考えている。
- 班で振り返りを行うことで、ふだんできたことを意識しにくい子供も、自分ができるようになったことに目を向け、振り返ることができていた。
- さらに観点を明示した振り返りを学級全体で徹底することで、よりメタ認知を促すことができたのではないかと考えている。また、教師や友達との考えの比較により、メタ認知を働かせている場面も見られた。今後は働きかけによって、より共通点や差異点に目を向けられるようにしていきたい。
- 今回の実践では、レストランでのやり取りが始まると、各ブースに店員としてママーズが入ることにより、ママーズに聞きに行きにくい状況であった。活動中にも聞きに行ける場があると、より自分の思いに合わせて、言葉を選んでいこうとする姿が見られたのではないだろうか。